

本主義とは如何なるものであるか又如何にして生活を擁護するのであるかに就いては一言半句もふれてゐないのだから。日本主義は彼等の裏切りの方便に過ぎないのだ。それを南無妙法蓮華經や南無阿彌陀佛の御題目に過ぎないのだから。彼等は最近創立宣言草案であるとか、ピラを出して組織の弱い職場に働きかけをしてゐる。

本部は此の彼等の策動に對しては一步も假借する所なく、彼等の本質や行動をピラ、ニュース、機關紙によつて痛烈に暴露し、彼等の策動を二葉の裡に木葉微塵に粉碎せんとしてゐる。彼等の策謀に對しては職場内で大衆的に押しつぶさねばならぬ。

彼等と通謀して當局の手先として働く者に對しては、斷然たる處分をする決意を持つて臨んでゐる。交總も又第四回常任委員會に於て絶對排撃を決議し、加盟組合各支部に通達して斷乎として排撃闘争することになつたのである。

闘争を前にして裏切の陰謀を粉碎しなければならぬ。此のこそ勝利の第一歩だ。

### 九、支部役員改選と各部の大會

第二の更生案を目の前にして又東交の統一を完成するための支部役員選挙は、八月二十二日電報部三の輪支部を皮切りとし、九月十八日の赤坂支部を殿りとして全部終了した。本

役員選定に當つては二、三支部を除いては全部一般投票により行はれ、大衆の意志を充分反映し、選挙闘争を通じて組織を強化し闘争力を充實せしめた。支部長副支部長左の如し。

### 電 車 部

- △三田支部 支 部 長 星 名 久 司
- 副 支 部 長 渡 邊 秀 治
- 同 支 部 長 岡 本 丑 太 郎
- △青 山 支 部 支 部 長 田 中 房 雄
- 副 支 部 長 菅 原 正 松
- △新 宿 支 部 支 部 長 菅 原 正 松
- 副 支 部 長 長 島 秀 吉
- △柳 島 支 部 支 部 長 志 倉 朝 次 郎
- 同 支 部 長 矢 代 秀 男
- △大 塚 支 部 支 部 長 須 田 菊 次
- 副 支 部 長 須 田 菊 次
- △巢 鴨 支 部 支 部 長 伊 藤 政 一

### 軌 工 部

- 支 部 長 五十嵐子女次郎
- 副 支 部 長 吉 田 兼 十 郎
- △芝 浦 支 部 支 部 長 永 野 仁 太 郎
- 支 部 長 河 野 平 次
- △數寄屋橋支部 支 部 長 鈴 木 幸 次 郎
- △春 日 町 支 部 支 部 長 池 田 六 吉
- △測 量 支 部 支 部 長 菊 地 省 三
- △青 山 支 部 支 部 長 良 方 仁 三 郎
- △南 千 住 支 部 支 部 長 三 宅 藤 吉
- △深 川 支 部 支 部 長 渡 邊 五 一 郎
- △大 門 支 部 支 部 長 大 山 高

### 車 庫 部

- △同 副 支 部 長 中 内 由 松
- △三の輪支部 支 部 長 佐 藤 傳 平
- 副 支 部 長 野 平 末 松
- 同 支 部 長 稻 見 千 里 茂
- △青 南 支 部 支 部 長 柳 田 豊 茂
- 副 支 部 長 金 本 三 郎
- △赤 坂 支 部 支 部 長 橋 本 三 郎
- 副 支 部 長 草 野 友 四 郎
- △廣 尾 支 部 支 部 長 淺 野 繁 雄
- 副 支 部 長 牧 野 松 太 郎
- 同 支 部 長 淺 川 仲 治
- △早 稻 田 支 部 支 部 長 菅 野 丑 之 助
- 副 支 部 長 内 海 寅 吉
- △錦 糸 堀 支 部 支 部 長 村 越 喜 一
- 副 支 部 長 鈴 木 健 一
- △神明町支部 支 部 長 掛 木 禮 盛